

[25]

氏 名	花 蕾
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学 位 記 番 号	外博第 38 号
学 位 授 与 の 日 付	2024 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	中日同形近义词研究 ——以对日汉语教学为视角——
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 玄 幸子 副 査 教 授 沈 国威 副 査 教 授 山 崎 直樹 専門審査委員 教 授 古 川 裕（大阪大学）

論 文 内 容 の 要 旨

花蕾氏の博士学位請求論文「中日同形近义词研究 —以对日汉语教学为视角—」（日中同形類義語研究—日本語母語話者への中国語教育を視点として—）は中国語と日本語の同形類義語について字形および語義・用法を総合的に分析整理し、日本語母語話者の中国語学習における文字（簡体字）習得および同形語の語義把握の正確さを期するための指針およびデータを提示したものである。論文の構成は次のとおりである。

序 章：

第一章：中日同形词的汉字字形

第二章：中日同形近义词的数量与词义分析

第三章：中日同形近义词的语义色彩

第四章：中日同形近义词的搭配研究

第五章：中日同形近义词的常用词与概念范畴

第六章：中日同形近义词的反序词

終 章：

参考文献

資料

序章では日中同形類義語に関する研究背景を概観し、本研究の位置づけと研究目的、研究方法を明示している。

第一章は、漢字字形の問題に焦点を当て、同形の定義を明確にし、ゲシュタルトの原則を援用した先行研究の漢字教授法を日本語母語話者に適用する場合において、使用文字に漢字を有する日本語母語話者の特異性から「対照教育法」が有効であると提言し、「日中同形漢字の対照字表」を作成し提示した。

第二章は、日中・中日の両種の辞典の対訳に着目し、代表的な辞書を調査対象として収録される二字同形類義語について見出し語と語釈の実数と分布について悉皆調査を行ったデータに基づき分析している。その結果、日中辞典の見出し語と語釈の一致度が中日辞典のそれよりも多く、日本語から中国語に翻訳する場合に同形語の使用率が高くなることが明らかになった。また、両言語の基本語彙を調査した結果、語彙レベルが高いほど二字同形類義語の割合が増えることが確認された。さらに両言語に見られる語彙レベルの不一致をプロトタイプ理論を適応しその原因が次の2点に求められるとしている。「一語多義」では「概念の中心性」が異なるため、「一物多名」では両言語間の概念カテゴリー内で「命名」の典型性が異なるために生じると結論付けている。

第三章は、日中同形類義語の語義色彩について、感情色彩の褒貶、具体・抽象、比喩、古義・今義の四つの面から考察し、両言語の語義色彩の差異を分析する。褒貶義においては日本語（褒義）・中国語（貶義）である同形類義語はその逆の日本語（貶義）・中国語（褒義）である場合よりも多いというデータを得た。具体・抽象面では、日中同形語の意味項目が重なる場合、共通する意味の項目はより具体的な意味をもつことも明らかとなった。比喩面においては、日中同形語においてその使用傾向がほぼ同一であることを確認し、古義・今義については、現代日本語に中国古典での意味を残存しているのに比して、中国語ではむしろ近現代での使用意味を古義として残存している状況を明らかにしている。

第四章は、両言語の歴史コーパスを利用し、日中同形類義語のうち特に形容詞を取り上げてコロケーションを調査した。共起ネットワークを分析するのに『分類語彙表』を活用し共起語の意味範疇を明確にしている。つまり日中同形類義語形容詞に連なる名詞・動詞は抽象的かつ精神的な状態や行動を意味する傾向がはるかに強く、具体的な物事や自然現象にはほとんど使用されないことを明らかにした。

第五章は、日中同形類義語の常用語の範囲と意味範疇の分布を明らかにするため各言語の代表的な工具書である《现代汉语常用词表》（第2版）と『常用語辞典』を対象に調査をし分析している。調査結果から日中両言語で共通の意味項目において常用語が使用される傾向があることがわかった。さらに、この判断の基づく意味項目数は両言語の概念範疇の差異の大きさに関連していることも明かにしている。

第六章は余論に位置付けられるが、日中同形類義語を広義に解釈し鏡像語について考察したものである。第二章で調査対象とした両種辞書中における鏡像語の実数と構造を考察し、見出し語と語釈の一致語数と一致度を求め、第二章で得られた日中同形類義語の一致度と比較した結果、

鏡像語は一致度が低く意味距離がより遠いことが明らかとなった。

終章には全体を総括し、データをまとめて収録した。

以上が本論文の概要である。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：玄幸子、沈国威、山崎直樹）は、花蕾氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうか確認した。その結果、同氏は、1）必要単位（10 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で 2）論文 5 編（査読あり国際誌掲載論文 1 編、査読あり全国学会紀要掲載論文 1 編を含む）、3）口頭発表 4 回（うち国際大会 2 回、全国大会 2 回を含む）を有し、4）博士論文聴聞会（令和 4 年 1 月 2 6 日）も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（令和 5 年 7 月 2 6 日開催）に報告し、同氏からの論文提出を承認する決議を得た。これを受けて令和 5 年 9 月 3 0 日に花蕾氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（令和 5 年 1 0 月 1 1 日日開催）において承認された論文審査委員会（主査：玄幸子、副査：沈国威、副査：山崎直樹、学外委員：古川裕大阪大学人文学研究科・外国語学部教授）での審査に入った。また、同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された論文では、日中同形類義語に関して先行研究を踏まえながら総合的な整理を行ったうえで、独自の分析基準を構築し、日中中日辞書における見出し語と語釈の一致度を調査するなど、従来の研究に見られない新たな視点と分析法を用いて考察しまとめている。いうまでもなく日中同形語に関する研究は枚挙にいとまのないほど多数の蓄積があるものの「同形」の定義一つを取ってみてもその定義はあいまいで、特に現代中国語普通話の正体字である簡体字との比較をするうえでの「同形」の定義を新たな視点で捉えなおすことは重要であろう。更に分析においては、主観的判断に偏ることを避けるために、主として工具書の記載によってデータを収集し整理したうえで分析するという手順を踏んでおり、今のところ手堅い方法をとっている点も評価されよう。勿論工具書については依拠するに値するか否かという評価を慎重に検討したうえで選出する必要があるが、選出の選択肢自体がさほど多くない現段階では、やむを得ない事情もあり、むしろ本論で取り上げられている個別の小テーマについて検討材料を提示したという点において大きな意味を有すると考えられる。今後各個別テーマについてさらに研究を深化させていくことが大いに期待される。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。